

「遍路日記」に見る四国、その内と外と

Shikoku as seen through pilgrim diaries - from the inside and outside

胡 光 (愛媛大学法文学部)

Hikaru EBESU, Associate Professor, Faculty of Law and Letters, Ehime University,

The Shikoku pilgrimage can be thought to consist of three parts: the people who make the pilgrimage (*ohenro-san*), the sacred sites (*reijō*); and the supportive community. When conducting research on the Shikoku pilgrimage it is important that these three items not only be treated as separate research topics, but also that they be examined collectively. Thus far, research on pilgrims by analyzing *annnaiki* (guidebooks) and *ryokōnikki* (travel books) has been carried out the most, but the number of travel diaries that have been presented is still quite few. As well, guidebooks have guided people from the Kinai (Kansai) area to Shikoku and there have been many travel diaries with similar content. For this paper I first introduce a pilgrim diary from someone in Kyushu and then compare it with pilgrim diaries from people within Shikoku. By doing such, I clarify how Shikoku was looked at during the late Edo period from people inside and outside.

The pilgrim diaries that I highlight are the Saji family records stored in the Fukuoka Prefectural library and the Niinobe family records stored in the Kagawa prefectural museum. Saji Tokusaemon, the first of the Saji family, served under Kuroda Nagamasa (1568-1623) and participated in the battle of Sekigahara. Later, he lived in the village of Tsuyazaki (presently Fukutsu-city of Fukuoka prefecture) and for generations ran a sake manufacturing business. The Niinobe family first served under Ikoma Chikamasa (1526-1603), and later lived in the village of Yoshizu (present-day Mitoyo-city of Kagawa prefecture) and worked as the village headman.

はじめに

四国遍路は、「遍路する人々 (おへんろさん)」「霊場」「支える地域」から構成されていると考えられる。これらを個別に研究対象とし、かつ総合的に考察することが四国遍路の研究では重要である。三つの構成要素の内、最も研究が進んでいるのは、「案内記」や「遍路日記 (道中記)」を分析する「遍路する人々 (おへんろさん)」の研究であるが、これまで紹介された「遍路日記」はそれほど多くない。さらに、「案内記」は畿内から四国への案内を行い、「遍路日記」もこれに沿うような内容のものが多かった。そこで本稿では、九州からの「遍路日記」を初めて紹介し、四国内からの「遍路日記」と比べながら、江戸時代後期の四国の姿を外側と内側から明らかにしてみたい。

江戸時代の遍路は、どこから来たか、常に引用されてきたのが前田卓氏が1971年に刊行した『巡礼の社会学』の分析であり、紀伊・摂津などの畿内を中心に、讃岐・阿波・備中などその周辺国からの遍路が多く、高野山を中心とする弘法大師信仰との関係を説くものである。しかしながら、この統計の出典は、寛文6年(1666)から明治初期(1880頃)までの四国霊場の過去帳としか記されておらず、何にしても、四国の地で亡くなった遍路数の集計であり、無事に遍路を終えた人々の数ではないということである。これまでの研究が、この出典の不明確さ(史料所在地の重要性などの無視)とその史料批判を全く行わず引用してきた点は看過できない問題点である。

近年、遍路道沿いで善根宿など接待を行ってきた旧家から俵札が相次いで発見され、その分析が進んできた。俵札とは、接待の返礼に受け取った納札を俵に詰めて天井に吊り下げ、厄災を除く御守りとしたもので、1000点を超える納札が詰まったものもあり、その分析には多大な労力を伴う。喜代吉栄徳氏は四国4県の俵札を比較検討され、内田九州男氏とクワメ・ナタリー氏は愛媛県今治市越智家のもの、稲田道彦氏は香川県さぬき市寒川家のもの、香川県文化振興課では同県善通寺市細川家のものの分析を終えている。

俵に詰まった江戸～明治時代を中心とするこれらの納札から判明した遍路の生国は、越智家の場合、阿波・

伊予・備中が多く、讃岐・紀伊・備前・摂津・備後・安芸が続く、他の畿内諸国と同程度に豊後・筑前などの九州諸国も含まれている。寒川家の場合、讃岐・伊予・紀伊・阿波・備後・豊後・淡路・摂津と続く。細川家の場合は、愛媛・香川・徳島が突出し、兵庫・広島・岡山県が続いている。このように、各分析結果は、前田氏の提示とは大きく異なるものであり、かつ地域的な特徴も見ることがうかがえる。

地域的な特徴とは即ち、対岸からの遍路が多いこと、自国を中心に四国内からの遍路が多いことである。そこで本稿では、伊予国内の霊場などの史料と比較しながら、伊予国（愛媛県）に近い九州からの遍路と四国内の遍路の実態をその「遍路日記」から追うこととする。

1 筑前国からの遍路

筆者は、福岡県立図書館に保管された「佐治家文書」（佐治洋一氏蔵）について調べていたところ、「四国日記」なる史料に出会った。閲覧すると、果たしてこれまで研究のない九州からの「遍路日記」であった。藍色の表紙を付した明朝綴の半紙二つ切本（10.5×14.5cm）であり、78丁もの本紙から成る。残念ながら、最後の78丁目の大半が欠落しており、日記の最終日が不明であるとともに、作者や作成年の情報がない。

しかし、冒頭部分には、「同行連名、佐治徳左衛門母、伊東作次郎母、川崎幸助、安藤卯右衛門、横町新八、同正七」とあり、佐治家伝来の古記録であることから、当主である佐治徳左衛門の母を同行して遍路を行い、敬称を付けずに日記に記録できる人物、佐治家当主に近い一族の者を作者として推定できる。さらに、3月26日条に「此節六十一年ふりの御開帳にて扱も賑敷事也」という金毘羅開帳の記事が見られることから、金堂が完成した弘化2年（1845）の制作との年次比定が可能である。

本書の特徴は、平仮名交じりの流麗な文字で記され、同じ語句を別の文字で書き分ける一たとえば「なり」「也」「成」など、文章表現にかなりの創意工夫が見られ、その教養が計られる。さらに狂歌をたしなみ、画を能くする。宿の近所の人からも求められているので、腕のほどが知られよう。記述内容は、札所と行程だけでなく、当時の村々の様子や同行人の心身の状況まで記され、これほど詳細で膨大な「遍路日記」は類を見ない。記事については、巻末の別稿「巡礼と『道中日記』の諸相」を参照されたい。

上記に加えて、記述内容の特徴に毎日の食事と風呂の様子を必ず記していることがあげられる。これらのことから、解読を始めた当初は、江戸時代の女性が記した珍しい「遍路日記」かと想像しながら読んでいた。町場では芝居を見物し、伊予国65番札所三角寺に至っては、難所の奥の院（仙遊寺）にも参り、女人禁制である高野山に代る「女人高野」の信仰を記すことから、さらにその思いを強めていたが、土佐国24番札所東寺では女人禁制であるため、女達と別れ、同国25番札所津寺から26番札所西寺へかけては、男道と女道に分かれ、後に女中連と合流して昼食をとる記事が表れたため、作者は男性であることが確定した。それでも、老齢と思しき女性二人を伴う旅であり、このため後に同行となる連中も女性が多く、如上の特徴が生じたのであろう。このことは、身体をいたわりながらの道中ともなり、日記の分量を増やすことにもつながった。

さて、この日記を残した作者にも関わる佐治家は、近江国甲賀郡小佐治村に生まれた与助を祖とし、与助は関ヶ原合戦で黒田長政に仕え功があったため、黒田家が300石で抱えようとするが、断り、筑前国宗像郡津屋崎村（福岡県福津市）に土着する。二代徳左衛門から酒造業を始め、宗像郡内最大の酒屋として栄え、漁業や精米業など多角経営も行い、代々徳左衛門を名乗ったようである。

いわゆる豪商佐治家の由緒は、身体的な理由だけでなく、悪天候の日は宿に留まり続けるような日程・費用に制限を設けない遍路を可能としている。「日記」の行程は、津屋崎を出発して伊予国三津浜に上陸するまでに24日を要し、三津浜から北上し四国を一周、道後に至るまで55日、三津浜から津屋崎に戻るまで11日、2月22日に出発し5月23日（欠損部推定）まで合計90日間に及ぶ。四国遍路は、農閑期の2～3月に多いと言われ、俵札の分析からもこれが裏付けられる。しかし、商家の当遍路は3月下旬に四国入りするので、一般的な遍路とは時期がずれる。5月になると、田植えが始まるため、宿を借るのに苦勞している様子が記されている。他に何組もの同行も見られるので、同時期の遍路が少なからずあったことも分かる。日々の記述の最後には、里程、宿名、宿代、食事代などが記される。

まずは、九州から四国上陸までの行程を見てみよう。宿泊地のみを記してみると、（筑前）津屋崎、川端、芦屋、黒崎沖、（長門）下関、川棚、西市、正明市、萩、笹波、（周防）柊、富海、福川、竹嶋、大津嶋、上関、岩国、（安芸）宮嶋、音戸である。出発日には、氏神に参詣後、町内の挨拶と寺社参詣を行い、最後に金

毘羅宮で大師講中の大宴会を催している。このことから、海運にも関わる佐治家一行の四国遍路の目的は、金堂落成による金毘羅開帳を見に行くことが大きかったのではないかとも思われる。

津屋崎を出た後は芦屋にて船を借り、海路にて下関に渡るが、途中上陸して小倉城下町の見物をしている。中国路は、あえて南の山陽道をとらず、川棚などの温泉地を経由しつつ、萩まで北上、萩城下を見物した後、南下してようやく山陽道へ出ている。途次は、名所旧跡寺社参詣を行いつつ、夜店・芝居などの見物も忘れていない。巻頭にあった筑後久留米連中と同行になり、福川で船を雇い、海路で北上し、岩国、宮嶋に至る。見物は相変わらずで、錦帯橋と巖島神社は図入りで紹介されている。宮嶋では、案内人を雇って、弥山に登り弘法大師遺蹟を含む名所を訪ね、土産を買い、観光的信仰の旅が極まる。当道中の特徴のひとつに各地の土産購入があげられる。一般の遍路でも土産購入は見られるが、最終札所に近い町で購入し、帰路につくことが多い。ここでは、たまった土産を筑前行の船に託し、随時送り届けているのである。

この観光的色彩の強い岩国・宮嶋見物であるが、江戸時代後期には、畿内を対象とした四国遍路案内図にも金毘羅とともに描かれているので、四国遍路との組み合わせは一般的なものであり、逆方向の九州からの遍路の際にも立ち寄るものであったことが分かる。すると、湯治をしながら萩城下まで北上するのは当道中の特徴か、九州からの遍路の一般的なコースか、他の「遍路日記」の発見が待たれる。

中国路の記事でもう一つ気になるのが、3月朔日条、西市宿近くの「ならわら」町での「しゆ行初メ」である。シンポジウムでは、門付ではないかとの指摘をいただいたが、上のような豪遊をする豪商一行であり、必ずしも当てはまらないと考えていた。改めて見直すと、4月2日条、志度にて「外の同行ハ町内しゆ行に参る」の記事があった。巡礼には門付が付きものであるが、当道中では2回しか行っていないと解することもできる。具体像も含めて今後再検討してみたい。

次に、九州・中国路から四国への上陸の方法について見てみよう。畿内方面からの上陸方法との大きな違いは定期船がないことである。福川で借りた船で、岩国・宮嶋を巡り、音戸を経て、三津浜に上陸した。帰路は、同じ三津浜から柳井行き船に居合わせたため、興居島、周防大嶋経由で渡った。

三津浜上陸後、四国遍路中の宿泊地は、(伊予) 朝浪、今治、桜井、大戸、大町、常、奥院、(讃岐) 粟井、下高野、吉原、金毘羅、宇田津、国分寺、北、志度、長尾、長野、引田、(阿波) 撫養、大城、矢竹、敷地、嶋田、徳島、中津、棚野、荒田野、日和佐、麦野、(土佐) 勘の浦、崎の浜、唐の津呂浦、かりうご浦、秋、戸板島、五台山、高岡、須崎、根之崎、佐賀、間崎、津呂、九桃、江野、(伊予) 広ミ、正木、野井、則、北多田、井能キ(五百木)、熊野(久方)、東明神、道後である。

四国遍路時の記述の特徴は、「接待」が現われることである。接待の内容、主まで詳細に記され、日々の最後には、納めた札数(参った札所数)と接待数が集計されている。まさに接待は、四国遍路の特徴であることを当時の人も認識していたのである。接待の内容は様々で、食料が最も多いが、月代髪結い、草鞋など、遍路に必要なものが全て含まれている。接待の一種に善根宿があるが、この場合、宿代が無料になるのであって、食事代、布団代、蚊帳代などその他の必要経費は支払っていることが多い。宿泊場所は、総体的には善根宿でない一般の百姓家が多く、必要経費に宿代が加わる。よって、昼の食事は接待で賄えたとしても、夜は野宿しない限り、相当な経費がかかったことが分かる。

上陸後、「初札奉納」は52番札所太山寺である。三津浜や高浜の港に近い太山寺は、豊後の真野長者が用明2年(587)に開いたと伝えられる古刹で、鎌倉時代建立の本堂は国宝に指定されている。筆者は、愛媛県美術館と共同で同寺の総合調査に着手し、大量の古文書を発見し、整理・分析している。今回調査した江戸時代の古文書からは、松山城を築いた加藤嘉明やその後の松平家歴代当主から篤く信仰された様子や、九州・中国地方からの遍路が増え、三津の古港だけでなく高浜の新港から上陸し、太山寺から遍路を始める様子が分かってきた。その一端を示す史料を紹介しておこう【太山寺文書B1-15】。

(端裏) 「代官松田佐五左衛門様 郡奉行宮川武太夫」

以手紙致啓上候、然者太山寺江参詣之旅人、高濱方船揚り之儀、近年差留有之候所、前之通右参詣之旅人ハ高濱方船揚させ候様御目付中被申聞候間、其段番人共江可被仰聞候、已上

正月二日

享保八卯年正月二日、右本紙御代官所江戻ス

同寺の建造物には、幕末から明治の年記を持つ大量の落書きが残されているのも他寺にない特徴である。

書き残した人々の生国が九州・中国筋が多く目につくのは、西方からの遍路の「初札奉納」地であったことが影響しているのかもしれない。

太山寺納札後の四国遍路の分析は、後日を期すとして、再び松山に戻ってからの結願の様子を見ておこう。最終日は、46番札所浄瑠璃寺から始まり、最後の札所51番石手寺にて「此所打仕廻につき一切ぬき納メ又受」ことになる。そして、道後の湯につかり、「其夕御札仕廻の心祝いとて酒など買祝ひ申也」とくつろぎ、衛門三郎伝説も記され、6ヶ寺も巡ったこの日は結願の日にあつたらしい。三津浜・太山寺から始まり、道後・石手寺で終る西方からの遍路は、巡礼としてもツーリズムとしてもよくできたコースと言える。

2 讃岐国からの遍路

四国内の「遍路日記」として、讃岐国三野郡吉津村（香川県三豊市）で庄屋を務めた新延家に伝わる、天保4年（1833）「四国順禮道中記録」を紹介したい。本書は、1994年に喜代吉栄徳氏によって全文が紹介され、その後、筆者が新延家文書全2,421点を調査し、香川県歴史博物館（現香川県立ミュージアム）に収蔵したものである。喜代吉氏の翻刻には若干の誤読が見られるため、今回全文を精査し活用したが、紙幅の関係上、本稿での原文紹介は割愛させていただく。

当家は南北朝時代伊予に下向してきた脇屋（新田）義助の末裔で、天正16年（1588）生駒雅楽頭近規（親正）に従い、三野郡吉津郷に住み着いた新延義信権左衛門尉が讃岐新延家の初代になる。3代義成重左衛門は山崎治世下で吉津村庄屋を勤めた後、岡山藩納戸奉行を30年余勤めたと言う。京極氏入封後、5代仲里仲右衛門尉・6代文啓弥右衛門尉も庄屋役を勤め、仲右衛門の時吉津村田中から北村へ転居する。7代祐年安蔵は幼年時より多度郡堀江村関家の養子となり、堀江村の庄屋を勤めた。養父死後は新延家に戻り、誕生院代官等を勤めている。8代祐之丞も堀江村関家の養子となっていたが、明治7年頃新延家に戻ったようである。幕末期祐之丞は岡本村・笠岡村にも住んでいた。9代興市は、明治9年頃（30歳代前半）までには下高瀬・吉津村戸長役場に勤め始めており、その後用掛、書記、収入役、村会議員など吉津村政実務の中心人物として、また政治家として明治～大正期に活躍した。

本書は、小横帳（13.0×18.5cm）で本紙29丁からなる。本書も作者名がない。文中に、出立時の見送り人名が記され、7代祐年安蔵と思しき名前があり、年代的に見ても8代祐之丞義一が作者の可能性が高いが特定できない。本書は、天保4年2月20日同行九人で出立し、71番札所弥谷寺から打ちはじめ、讃岐・阿波・土佐・伊予・讃岐と巡り、4月2日に70番札所本山寺で終る42日間の典型的な農閑期の「遍路日記」である。本書の特徴としては、日記中に各所の状況や接待の様子が記される以外に、本書の後半14丁分、土産の内容と宛先、見送り人名、金銭出納が記されていることがあげられる。遍路に係る必要経費といかに多くの土産を用意したかが判明し、信仰の旅から観光の旅へと変化する実態がここでもうかがえる。

本書からも様々な遍路研究が可能であるが、本稿では前章でも遍路における重要性を指摘した道後温泉に関わる3月24日条を紹介したい。

一、道後横町船屋茂右衛門方ニ而滞留致候、湯八幡宮参詣并諸々見物致候、同所ニ而調物等致候、湯場壺之湯ハ平人出入無用由可有之由、然共松山家中方若侍式人入湯ニ参、壺人士被申候は、何国之人成候哉と申、讃岐之産ニ御座候、申候へは、左あれば帰国之砌ニ嘶ニも致候て可然と申候、右ニ付松山公御入湯之場所へ参、得々と見物致候、湯口得と見物被致と申ニ付、湯ニ足を入見候所誠ニ湯かげん暑さたへがたく候、湯は清水庭之切石すみやかニ見へ候、湯は股へ立候程之事也、此湯は松山公并諸士之湯治場也、次ニ式之湯は婦人、三之湯は男計、又次ニ養生湯ハ男女共入込也、次ニ馬之湯、是ハ□□□□、又は牛馬之湯場之由、

この記事に寄れば、当時の道後温泉は、壺之湯：松山侯を始めとする武家の湯、式之湯：婦人湯、三之湯：男湯、養生湯：男女混浴、馬之湯：牛馬湯の別があり、気さくな松山藩士によって、壺之湯を案内され、感嘆した様子が記されている。湯の区別があっても、全ての身分の人が温泉を利用しており、遍路も立寄っていたことが分かる。さらに、本書の土産記事では、最も多いのが「大師御影」、次が「道後艾」なのである。何れも運搬しやすいこともあろうが、心身を癒す遍路における道後温泉の重要性を物語っている。

全てと言ってもよい遍路が道後温泉に立寄っていたことを記す史料が道後温泉管理事務所に伝わっている。

定

當温泉者靈泉ニ在之候得者、左之通急度相心得、別坐不淨之者宿元方心ヲ添入湯為致申間敷事、
一、四国辺路通り掛之者、止宿三夜御免之義ニ差紛、正得湯治ニ罷越候者ヲ茂右等差別各條之者と申可
応留置迫而役場江中達候義、急度不相成候事、
一、四国辺路之外、其体不正之者并悪疾悪瘡之者入湯者養生湯ニ相限り、二之湯、三之湯者不相成候事、
一、湯之内ニ而楊枝ヲ遣イ、或者痰ヲはき候義、急度不相成候事、
一、湯治人入込、又者出立之節、當日役場江中達候事、
一、湯治人宿證文入込次第差出可申事、
一、抜湯治人差置候者相頼候ハ、一夜たり共御達申上候間、急度相心得可申事、
一、湯場之内桁江ふんとし相掛、草履、下駄釣下ケ候義、不相成、若不弁之者江者心ヲ添可申聞事、
一、荷物を湯場之内江参持、不相成、若不弁之者江者心ヲ添、指留可申事、
右之通、急度相心得可申候、万一心得違之者在之候ハ、早速役場江可申出候、以上、

安政二卯年

四月 役場

この文書は、江戸時代に道後温泉の管理を松山藩から任されていた明王院が出した定書と思われ、前年の大震災によって止まった温泉が復興した際に改めて出した入浴心得である。第1・2条が「四国辺路」に関する規定であり、遍路が優遇されている様子がうかがえる。即ち、遍路は宿泊を認めるが、湯治だけの客は宿泊をしてはいけないこと、遍路は二・三之湯を使ってよいが、正体不明の者や病気怪我人は養生湯に入ることが定められている。温泉と灸で遍路の疲れを癒し、その艾を土産に遍路を続けたのであろう。

おわりに

本稿では、これまでほとんど紹介されてこなかった九州と四国からの遍路の姿を「四国遍路日記（道中記）」によって考察した。何れも19世紀中葉の江戸時代後期の遍路の記録であり、この時期の特徴がよく表れている。遍路の主体が、修行僧から在家信者になり、修行の旅から信仰の旅へと変化することは既に述べたことがあるが、その変化を推進した真念の『四国辺路道指南』（貞享4年・1687）以降、19世紀に至るまでに、四国内外から関わらず、観光の旅への変化は顕著であった。このことは、土産、拝観料、案内料だけでなく、四国遍路の大きな特徴と言える「接待」があっても、宿泊料、食事料などの必要経費が相当かさむことにも表れている。

承応2年（1653）の澄禅による最古の「四国辺路日記」には、荒廃し山伏が住む札所が多く記されているが、真念の時代を経て、19世紀の札所は「奇麗」「大なる」と表現される発展を見せていた。大師堂も増え、日記の表現からも大師一尊化が進んだ様子がうかがえる。畿内以外からの遍路は、1番札所以外から自由に打ち始めているが、四国内の場合は在村近くから始まる。四国外からはある程度コースが内定しているように思われる。真念の時代には、自らが真念庵を作ったように、宿泊もままならなかったようであるが、日記中からは田植えの繁忙期という理由以外での宿泊の不便さは見えてこなかった。また道路も、急坂や岩石などによる難所の記載はあっても、澄禅が記したような道なき道を進む状況は見受けられなかった。

以上、「四国遍路日記」に見る江戸時代後期の四国内外の遍路の概要をまとめてみたが、気に留めておくべきは、両者とも豪商や庄屋家に関係する人々であり、財力と教養を持った、「日記の家」とも呼べる上層の遍路の姿であるということである。日記を残すことのできない大半の遍路の実態はなかなか見えてこない。最後に、筑前の佐治家一行が道後で結願した「四国日記」五月十二日条を引用して、当時の遍路の気持ちと日記を残せない遍路の姿に思いを寄せながら擱筆したい。

是迄札方札五十七日の間、同行中なさん、けだひなく御札を納メ候事、人力にあらず、誠に大師の御影にて、さかしき高山の登、恐ろしき谷奥にて夜を明し、道もなきが如き難所を遍巡り、数日の道中なれとも格別つかれわつらふ事もなく首尾能く御札納メ候事、今さら思ひませハ菅の如く、是偏ニ大師御道引き給ふゆへ申なれハ難有き事也、旅中のありさまを見るに病に掛たる遍路おひたしく、道々多きものハ遍路の墓也、罪深き者ハ御札納め得ずして途中帰り、あるひハ病死し、盗人に逢ころされなどする事多し、なれども正路にて巡る遍路にハ亡日の眼をひらき、つんぼの耳をきき、足なへの立しなど其外諸病願人の心に仍而平念せずと言事なく、御影にたすかりし者供悦事いくばくと言数を知らず、是へ

んろの心ちの事也、

【参考文献】

- 新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、1964年・新稿1982年
前田卓『巡礼の社会学』ミネルヴァ書房、1971年
近藤喜博『四国遍路』桜楓社、1971年
伊予史談会編『四国遍路記集』伊予史談会、1981年
喜代吉栄徳『四国辺路研究』第2号、1993年／第3号、1994年／第6号、1995年／第10号、1996年／第14号、1998年
内田九州男、クワメ・ナタリー「江戸時代の1308枚の資料について—伊予国阿方村越智家の遍路札—」（『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』、1997年）
胡光「新延謙資料解題」（『歴史博物館整備に伴う収蔵資料目録』香川県教育委員会、1998年）
津屋崎町史編さん委員会編『津屋崎町史』津屋崎町、資料編上巻・下巻(1)、1996年／通史編、1999年
愛媛県『四国遍路のあゆみ』愛媛県生涯学習センター、2001年
内田九州男「近世における四国諸藩の遍路統制」（『第1回四国地域史研究大会—四国遍路研究前進のために—公開シンポジウム・研究集会報告書』2009年）
稲田道彦『寒川家旧蔵の俵に詰められた札に関する研究』さぬき市教育委員会、2004年
頼富本宏『四国遍路とはなにか』角川選書、2009年
武田和昭『四国辺路の形成過程』岩田書院、2012年
香川県政策部文化振興課『善通寺市細川家の俵札』香川県、2013年
胡光「道後温泉における史料空間論」（愛媛大学「資料学」研究会『歴史の資料を読む』創風社、2013年）
胡光「四国八十八ヶ所霊場成立試論—大辺路・中辺路・小辺路の考察を中心として—」（『四国遍路と世界の巡礼』研究会『巡礼の歴史と現在 四国遍路と世界の巡礼』岩田書院、2013年）

【付 記】

本研究は、平成25年度愛媛大学地域連携プロジェクト支援経費「『四国八十八箇所霊場と遍路道』世界遺産登録に向けての共同調査研究」（研究代表者 胡光）、平成25年度愛媛大学研究活性化事業（萌芽的研究）「四国霊場の成立と発展に係る萌芽的研究」（研究代表者 胡光）、ならびに平成25年度科学研究費補助金（基盤研究B）「四国遍路の学際的総合研究—地域資料によるその実態解明と国際比較—」（研究代表者 寺内浩）による研究成果の一部である。

資料閲覧に関して、佐治洋一氏、新延謙氏、太山寺、福岡県立図書館、香川県立ミュージアム、道後温泉事務所の御協力を賜り、また香川県政策部文化振興課北山健一郎氏から資料提供をいただいた。記して深謝の意を表します。